

第四話

マグダラのマリヤ

「なぜ、泣いているのですか」

(ヨハネ二〇・一三)

♣ ゴルゴタの丘へ

その日の朝ほど祭りにふさわしい日和はないと、だれもが思いました。早朝から新しい季節の到来を告げる陽光がきらめき踊っていましたから。肌にふれる風の柔らかさといったらありません。どんな薄絹の衣もまねはできないでしょう。

都エルサレムは過越祭を祝おうと、世界の四方から集まってきた人の群れであふれかえっていました。もちろん彼らはユダヤ人。特に神殿に通じる路地という路地は互いのすが絡み合うほどの混雑ぶりでした。彼らは光と風にすっかり気分をよくし、久しぶりに取り戻した民族の誇りに酔いしれていました。先の見えない未来にもこの時だけは望みがあるような気がして、偉大な民族の神、天地創造の神に熱心な祈りをささげるのでした。

祭りに来てよかった。我らの神は祖国ユダヤをお見捨てにはならない。ローマに屈する日々もあとしばらくにちがいない。きつとメシヤがおいでになる。その日も近い。熱烈な愛国者たちは一様にそう信じ、心をたぎらせるのでした。

理由があるのです。

ナザレのイエスに、彼らは期待をしていました。

イエスがメシヤかも知れない。

この祭りの間にきつと事を起こすだろう。民衆の力を動員する絶好のチャンスではないか。愛国者だけではありません。遠くガリラヤからイエスに従ってきた一群ももちろんこの祭りの時に賭けていました。

そのイエスが……、

真夜中にあつさりと逮捕され、未明に行われた臨時裁判で十字架刑を即決され、二人の死刑囚とともにその日のうちに処刑されることになったとはだれが想像し得たでしょう。死刑の判決権と執行権を持つ最高権力者、ローマ総督ポンテオ・ピラト自身さえも、予測さえしなかったことでした。

まさか、そんなことが……。

マグダラのマリヤが耳を疑ったのも、同じことをふたたび聞いて卒倒しそうになったのも無理はありません。弟子たちが一人残らず動転したのも当然です。幾人かが判断力を喪失して不安にかられ、あわてて姿をくらましてしまったのも責められません。イエスを売った張本人のユダでさえ、事の意外な成り行きに狼狽し、ついに首を縊ってしまったのですから。

そして、ゴルゴタの丘がまもなく凄惨な刑場の舞台に様変わりするなどだれが思ったでしょう。丘の上は町中にもまして穏やかな光があふれ、祭りの喧騒が華やかな楽の音のように流れ聞こえていました。そこに鳥たちのさえずりが入り交じって澄みわたった空にこだましていました。世界のどこを探してもこれほど平和な場所はないと思われるほどでした。もちろん人影は皆無です。人という人はみんな町中に吸い寄せられ、興奮のるつぼの中で気を良くしてしまたから。

が、この丘が人でうずまるまでにたいした時間はかかりませんでした。百人隊長に率いられた死刑執行者と受刑者たちの一団が、その中にもちろんイエスがいるのです、総督官邸を出発するかしないかのうちに、情報は強風に飛び散る火の粉のように町中に飛んだのです。全身、目と耳に化した物見高い群衆が黙っているわけがありません。とっておきの出し物でも見るように狭い沿道に押し寄せ、大蛇の尾のように右に左にうねりながら丘にむかって上りつめて来ました。

♣ 十字架刑

マグダラのマリヤはその後方に紛れ込みました。人いきれでむせかえる暑さの中でしたが、

マリヤの体は氷柱を打ち込まれたように凍りつき、絶え間のない悪寒に震えていました。

助けてください。

助けてください、イエス様を。だれか、助けて。

天を仰ぐと、そこには先刻来の巨大な空が深い青さをたたえて悠々と広がってるのでした。恨めしいほど無心に澄みわたっているのです。

(どうしてそんなに晴れやかにしてられるの。イエス様の一大事だというのに)

マリヤはやり場のない怒りと悔しさを空におつけました。

どうしてこんなことになってしまったのか、なにをどのように考えればいいのか、まるでわからないのです。わかることはイエスの姿を見失つてはいけない、離れてはいけない、どこまでも自分の瞳の中に見続けなければならないという一事だけでした。

マリヤだけではありません。遠くガリラヤからイエスに従ってきた来た人々、とりわけ女たちの一団は一緒にひとつ思いの中にいました。色を失った顔が触れるほど身を寄せあつて、イエスを追ってきたのです。一人で立ちおおせるものではありませんでした。女たちはイエスを自分の命のように愛し信頼してきました。そのイエスをどうしてひとり置き去りにできましょう。囚人たちの両手、両足に釘を打ち込む音が聞こえてきた時、マリヤの意識は薄く遠くなつて

いきました。くちびるを噛みしめるのが精一杯でした。

(いつそ耳が聞こえなくなればいい、目も見えなくなればいい、見たくない、聞きたくない、どうしてイエス様がこんなひどい目にあうの……)

残酷な時間が一刻も早く過ぎさつてくれればいいと思いましたが。でもそれはイエスの死を意味することです。マリヤの思いは乱れに乱れるばかりでした。

♣ イエスの死

ひやりとした空気が首筋を通ってきました。

(おや、この暗さはどうしたの?)

一転、青空にあふれ返っていた光はいつのまにか消えて、丘全体が薄闇に覆われていました。どうしたことでしょう、夜の幕が下りてきていました。天体の運行が狂ったとしか思えません。それにしても奇妙なことに太陽はそのまま天空にとどまっているのです。ただしすっかり光を失って、すすけた円盤と化して不器用に浮かんでいるのです。

(ああっ)

(おおっ)

(不気味だ)

あちこちから驚きの声が聞こえて、地に倒れる者も出ました。足の力が抜けてうずくまる者もいました。群衆の間を細い悲しげな音を引きずりながら冷えた風がよるよると渡っていきました。

(天も地も知っているんだわ、このむごたらしさを。神様も嘆いておられるのだわ、この不正を) マリヤには天候の急変が納得できるのです。理解者が現れたように思えて混乱した思いがかすかに落ち着いてくるのでした。

薄暗がり透過して、マリヤは丘の一点に視線を走らせました。三本の十字架の立つ一点を、です。処刑が始まってからどれほどの時が過ぎたのか、むろんわかりません。気にしている者がいるとしたら責任者の百卒長とローマの兵士たち、それにイエスの処刑を願ったユダヤの宗道家たちでしょう。彼らは受刑者たちが一刻も早く息絶えるのを待っているのです。その後の処置があるからです。夕刻からは安息日が始まります。それまでに死体の埋葬を完了したいのです。

三本の十字架のうち両端の人影は揺れ動いているようでした。おそらく苦しみのあまり身もだえしているのでしょうか。

(イエス様は苦しみに耐えておられる)

マリヤは微動だにしない真ん中の十字架に目を凝らしました。十字架の上から足下まで、こゝろは下から上までと何度となく視線を往復させました。マリヤはひとつもあますところなく記憶しておきたかったです。どんな小さなことも見過ごすわけにはいかないのです。イエスのすべてを体に焼きつけておきたいのです。

できれば、わたしも十字架につきたい。

嘘ではなくマリヤは本気でそう思いました。

(十字架についておられるのはイエス様だけじゃない、私もともにかけられているの。お苦しみはどうていわからないけれど)

イエスと自分との絆きずなを確かめるように、いや、絆きずなで結びつけたくて、マリヤは十字架の足下から自分の足下まで地面の上に視線を往復させたのです。太い線を描きたくて何度も行き来させました。視線の上に自分の身を乗せ、心も魂も託して、そうしました。

と、かすかにしずくの音が聞こえてくるではありませんか。

(おやっ、雨?)

その瞬間、マリヤにはわかりました。

(血のしたたりだわ、イエス様の血のしずくよ)

マリヤはイエスのいのちの根源にふれた気がしました。もつとも貴いもつとも大切な音を聞いているのだと思いました。体の奥底から震えるような畏怖の思いが沸き上がってきました。マリヤは額を地に押しつけて耳を澄ませました。体中を耳にしました。

(すっかり聞きましたよ。イエス様のいのちの音を。大地がイエス様のいのちを受け取っている。ああ、私もいただく。イエス様はご自分のいのちを地の上に、この世に、いいえ、私に与えておられるのだ)

♣ 回想のマリヤ

マグダラのマリヤ…

イエスの女性一番弟子、いまでは周囲の者たちからそう認められていました。マリヤ自身もひそかにそう思っていましたし、そう呼ばれることが暗れがましくうれしく得意でもありました。人々は「マリヤ」と呼ぶより、たいていの時「マグダラのマリヤ」と呼びました。もつともイエスだけは決まって「マリヤ」でした。

男性弟子の筆頭ペテロは特にマリヤを心にかけてくれました。

イエスに従うようになった当初、マリヤは病床から無理して這い出して来たかのように血色も良くなかったし、手足はか細く痛々しいほどやつれていました。ペテロにはそんなマリヤが気がかりだったのでしょうか、よく声をかけてくれました。父親のように。

「マグダラのマリヤ、今日が目が輝いているぞ」

「マグダラのマリヤ、最近声に元気が出てきたなあ」

マリヤはペテロの励ましをうれしく思いました。兄か父のような親しみを覚え、信頼感を抱きました。

しかし何よりもマリヤに幸福な思いを与えたのは、そうした二人のやりとりをやさしく見守るイエスのまなざしでした。イエスには改まって声をかけられなくてもいいのです。マリヤにはイエスのいるところに自分がいるということだけで十分なのです。いつでもどんな時でも、振り向けばイエスのほほえみと愛に満ちた瞳に出会うことができました。イエスは忙しく活動していましたが、マリヤが姿を探すとまるですでに察していたようにマリヤの視線に応えるのでした。言葉の行き来はなくても、この交わりがマリヤに生きる力と喜びを与えるのでした。マリヤはこの先にながあってもイエスのいるところにいたい、ともにいるのだと固く決めていたのです。

マリヤは次第にイエス集団にとってなくてはならない存在となりました。マリヤはかいがいしく働きました。

七つの悪霊につかれた女と異名を取ったマリヤはもうどこにもいませんでした。イエスのおかげで、マリヤは七つの愛に満たされた女性に生まれ変わることができました。

イエスの血のしたたりは不規則なリズムでマリヤの耳をうち続けました。マリヤは意識を集中してふたつの耳に、心の耳に、魂の耳に刻みつけるのでした。

イエスの姿を見るのは今日を限りに終わるのだと、心のどこかが悟っていました。どんなに否定したくても、イエスのいのちは一瞬一瞬確実に失われていたのですから。

マリヤはイエスと初めて出会ったあの日の午後を今さらのように懐かしく思い出していました。ふるさと、マグダラの村で、マリヤはイエスに会ったのです。生まれ育った村里や田園風景もよみがえってきました。ああ、なんと懐かしい光景でしょう。

マグダラはユダヤの北方ガリラヤ湖の西岸に臨む豊かな美しい村でした。マリヤは少女時代の自分をあまりおぼえていません。活発だったのか、内気だったのか、利発な子であったのか、ほんやりしていたのか、知らないのです。人が時々、あんな娘じゃなかった、かわいそうにあ

れからすっかり変わってしまったよと、ささやくのを耳にしたことがあります。あれからと代名詞で表現される、何か大きな事件を契機に、マリヤの人格がすっかり変わってしまったのは確かなようです。それが大病を患ったためであったのか、家庭の問題であったのか、マリヤには記憶の痕跡もなかったし、村人のうわさも聞こえてこないのです。村人たちは好意から事実をひた隠しに隠してくれたのでしよう。真偽のほどははっきりしませんが、村祭のにぎわいの日に流れてきたよそ者に陵辱されたのだと、他人でも耳をふさぎたくなるようなささやきマリヤのいないところで口の端に上ったこともあります。

マリヤはなんとかして自分像を作り上げようとしたのですが、鮮明には描き切れないのでした。マリヤは自分が何者なのかわからなくて、それ恐ろしくなることもあります。

記憶といえ、近隣の幼なじみたちが結婚して他家に行ったり、花嫁を迎えたりするころ、病身だったということだけです。何日も飲食できず床にいたままの時もありました。起き上がる気力も体力もなく、昼となく夜となくうつうつと半眠状態で過ごすこともありました。

私は人たちがう、みじめな、だめな人間だと思ったのが自分自身との最初の対面でした。不幸な出会いでした。その時からマリヤの戦いが始まりました。絶え間なく襲ってくる黒雲のよくな不安と戦いました。悲しみの底なし沼に引きずり込まれていくのに逆らいました。何者か

わからないけれどあざわらう魔の存在に抵抗しました。マリヤは助けを求めて激しく泣き続けました。叫び続けました。時にはこぶしを上げ、足を踏み鳴らして悲鳴をあげました。そのうちに自分を制し切れなくなつてついに床を蹴つて飛び出し、戸外を疾走することもしばしばでした。そうなると、もう自分を認識したり制する力は失せていました。家の所在さえわかりません。髪は顔中からみつぎ、はきものは足になく、かき裂かれ土にまみれた衣がかるうじて細い体を包んでいるありさまでした。

狂人？

人々は声にごそ出しましたが、ひそかにそう思つて、目くばせしうなずき合つていました。七つの悪霊につかれていたんだよ。

そう、ささやき合うこともありました。

マリヤの過去はこの連続でした。体が病み、神経が病み、心が病み、魂が病み衰えていました。

◆ イエスとの出会い

そうでした、あの時もマリヤは病魔の猛攻撃を受けて、半分意識を削りとられていました。逃げるように、ちまたを、村はずれを、遠く野や丘をさまよっていました。いつ眠つたのか、

食べたのか、どこにいたのかもわかりませんでした。

そのマリヤをいきなり数人の人々が取り囲みました。人々は暴れる家畜を取り押さえるように、マリヤの手や腕や肩を力一杯つかむと、かなりの人々が集まっていますところへ引いていきました。マリヤはされるがままになっていました。暴挙の大波は収まりかけていて、放心状態でした。

「マリヤ、じっとしているんだよ。イエスのところに行こう。治るかもしれないから」

「いままでにマリヤのような病人が治ってるんだ」

「いいかい、騒ぐんじゃないよ。こんなチャンスは二度とないかも知れないからね」

人々はなだめすかすように言うのです。

イエスのもとに、マリヤは連れてこられたのでした。

その時のマリヤがいったい何歳になっていたのか、正確な年齢を知っている人はいませんでした。少女でなかったことだけは確かです。が、人々はまるで年端も行かない幼児のように扱うのでした。そうなのです、マリヤはいまだにだれからも一人前の大人として扱われたことはありませんでした。純朴な村人たちは決してマリヤに罵言を浴びせたり、あからさまな差別はしませんでした。むしろあわれんでいました。しかし敬遠だったのです。もし暴れ出されたら

たいへん。それだけの理由で腫れ物にさわるように遠くからそとやさしくしたのです。

マリヤだつて体調が良い時もありました。ごく普通に村のそこそこに出向くこともありましたが、でも、近づいてくる人はいませんでした。マリヤを見かけると疫病神に出会つたようにそそくさと足早に去つていくのでした。マリヤがあいさつなどしようものなら、異様なものを見たように驚きの色を隠そうともせず立ちすくむ人さえいました。村人たちの態度はマリヤを底知れない孤独の幽谷に突き落としました。

私の居場所はどこにあるの。安心できるところはないの。

マリヤの魂は荒野を這う砂塵のように悲しげな叫び声を上げ、すすり泣いていました。

イエスはガリラヤ湖畔の町々村々を巡回しながら伝道活動をしていました。イエスの評判を知らない者は一人もないほどに名が広まり、信奉者は増えに増えていました。イエスの行くところいつでも群衆が押し迫ってきました。

マグダラの村でイエスが話し始めてから、数時間は経過したでしょうか、陽が天中に達していましたから昼が近づいているのがわかりました。暑いくらいの日差しが群れの上に注いでいました。汗をかいて上着を脱ぐ者もいました。

イエスは静かに語り続けていました。一人一人の表情を見守りながら、だれにでも理解でき

るように、時々卑近な例えを交えて、まことの神の国のありさまを解き明かしていました。

最前列に、マリヤは座らせられました。されるがままになっていました。おとなしくじっと座り続けていました。が、マリヤは少しもイエスを見てはいませんでしたし、耳を傾けているでもありませんでした。少し首を右に傾けて、それがマリヤの癖でしたが、うつむいたままでした。

♣目覚めるマリヤ

一刻、一刻と、時が規則正しく歩みを進めていました。

マリヤの肩先も規則正しく上がり下がりがりし始めて、呼吸が整ってきているのがわかりました。と、マリヤは眠りから覚めたように空を見上げました。首を反らせて右に次にはゆつくりと左に視線を移しました。

ああ、そうです、そこには大きな豊かな空が無限に広がっていました。明るく青く透き通った輝きと静かさがマリヤの視線を受け止めたのです。マリヤはその一片をそのまま切り取って自分の心にはめ込もうとしているようでした。マリヤの魂の深層で、かすかに動くものがありました。

光が欲しい！

俄然、マリヤの魂が目を覚まし、叫び出しました。

水が欲しい！

マリヤの魂がもがき始めました。

風が欲しい！

マリヤの魂は呼吸を始めました。

愛が欲しい！

マリヤの魂は生きる力を必要としていました。

イエスは相変わらず人々を見やりながら語り続けていました。

が、イエスのまなざしはマリヤをしつかりと捉えていました。イエスの瞳の中にマリヤが大きく写っていました。マリヤだけしかいませんでした。イエスはマリヤの魂の変化をひとかけらも見逃したりはしませんでした。

空腹の赤子が母の乳房を探すように、マリヤの視線は空をまさぐっていました。満足できるものが見つかからないのです。空の明るさも、青さも、行き交う涼風も魂の糧にはならないのです。マリヤのまなざしがまた動き出しイエスに向かった時でした。

その一瞬を、イエスは逃しはしませんでした。待ち構えてすくい上げたのです。イエスは初めからこの時を待っていたのです。この時が必ず来ると期待しながら待ち続けていたのです。

それっきり、マリヤはまばたきひとつしないうでイエスを見つめ続けました。探していたものがようやく見つかつたのです。

ほどなく、マリヤの瞳に灯がともりました。灯は光度を上げ、光りにいのちのきらめきが見え始め、またたくまに一等星のように輝き出しました。と、同時に青ざめたほが色づき始めました。

私のところに来なさい。休ませてあげよう。

イエスの視線は静かにそう語っていました。

休ませてあげよう……？、休ませてあげよう……、私を、この私を、ですか。

マリヤの魂はうろたえて聞き返しました。

そう、あなたを休ませてあげよう。私のところに来なさい。

イエスはうなずきながらくり返しました。

ほんとうに、ほんとうに休んでいいのですか。

マリヤの魂はまだ信じられないのです。

マリヤ、私のところに来なさい。ゆっくり休んでいいのです。

マリヤの魂はようやくイエスの語りかけを受け入れました。

ああ、ずっと、ずっと、探していたのです、そのおことばが聞きたかったのです。いいのですか、休んでも。あなたのおそばで休ませていただけるのですか。

いいんだよ、ずっと、ずっと。

マリヤの瞳から細かい涙がひとすじほほを伝わり落ちました。

「マリヤ、なぜ泣いているのですか」

イエスは身をかがめてマリヤに語りかけました。

「主よ…」

マリヤは声を詰まらせてようやくそう言いました。新しい涙がまたもあふれました。

「なぜ泣いているのですか、マリヤ」

イエスは再び声をかけました。

「いいえ、もう泣きません、決して、イエス様」

そう答えながら、マリヤは満身の力を込めて立ち上がりました。みごとにすきつと、立ったのです。

群衆が割れて、どつと驚きの声が吹き出しました。

「おお、マリヤがいやされたぞ！」

「七つの悪霊がたつた今、出ていった！」

「奇蹟だ。奇蹟だ。早くマリヤの家知らせるんだ！」

「おお、イエスよ、あなたこそ神の子です！ 神の子です！」

感嘆の声は互いによつかり合い絡み合つて大小の波になり渦になりましたが、まもなくはじけて空に飛び散っていききました。

マリヤは静かに髪をなでつけ、衣のすそに目を落として身じまいを正しました。もう、荒々しい病いの姿は片りんもありませんでした。マリヤはイエスと居並ぶ群衆に向かつて無言ではありましたが深々と頭を下げると、確かな足取りで立ち去っていききました。イエスも群衆も申し合わせたように静かにマリヤを見送りました。これからはマリヤはひとりで自分の人生を生きていけるとだれもがそう信じました。手を貸す必要はない、いや貸してはいけないと思うのでした。

数日後、村人たちはマリヤをイエスに従う弟子群の中に見つけました。マリヤはイエスとともに生きる道を選び取ったのです。その生き方を批判する者は一人もいませんでした。だれも

がしごく当然の成り行きだと進んで肯定しました。不幸続きだった不憫な娘にようやく訪れた新しい人生が幸せ続きであるようにと、気のいい村人たちはそう願いました。大切な身内を一人イエスに託すような氣の入れ方でした。マリヤはためらいもなくイエスの群れに飛び込んだのです。イエスのいるところが、マリヤの居場所だったのです。

◆イエスの墓

十字架上で息絶えたイエスの体はアリマタヤのヨセフの所有地である墓地に早々に埋葬されました。そこは岩山をくりぬいた洞穴で正式に墓とは名付けがたい場所でした。まだひとりも葬られていなかったからです。

ヨセフは以前からイエスの信奉者でしたが、弟子入りをして表立った行動をすることを避けてきた人でした。当局との摩擦を恐れて日和見的な態度を取ってきたと言っていていいでしょう。そのヨセフがイエスが死んだと知ると、俄然、行動の人となつたのです。総督ピラトのもとに駆けつけ、遺体引き取りと埋葬の許可を願ひ出たのでした。ピラトは深く詮索もせずひどくあっさりとして認可しました。彼は一日中苦々しい敗北感に打ちのめされていました。ローマの総督の権威を発揮してイエスに十字架刑の判決を下したものの、ユダヤ人たちに押しきられたことは

紛れもない事実でしたから。自認するたびに苦い胃液がつき上げてくるような後味の悪さを持ってあましていたところでした。ヨセフの申し出はイエスとの係りあいから解放される願ってもない好機と思えました。それに、安息日の始まる時刻が迫ってきていましたから、ことを急がねばなりませんでした。実際、ピラトにとってユダヤ人の習慣の中で何が腹立たしいといって、安息日律法ほど理解に苦しむ不愉快なものはありませんでした。その間彼らは文字通り命を取られるような事態が発生しても指一本すら動かそうとしないからです。

ピラトのもとにはイエスは確かに墓の中に納められたこと、墓の入口は二、三人でも動かさない大石で塞ぎ、封印までしたと、その両側を兵士たちが徹夜の番をする手はずになっていたとの報告が届きました。ピラトはこの報を聞いてようやく息ついて腰を下ろす気になったのでした。

安息日が始まれば丸一日は何も起こるはずはない。

ピラトが安息日を好ましく思ったのは後にも先にもこの一日だけでした。ユダヤ人だけに重要なはずのこの一日が、ローマの総督ピラトにとってこの上もない安息の日となったとは何となく皮肉でしょう。

そうそう、ピラトに長々と言及する暇はありません。マリヤを追いかけねばなりません。ヒ

ロインを見失つては物語が成り立ちません。

マリヤがアリマタヤのヨセフに密着したのは言うまでもありません。イエスの十二弟子たちも、いえ、卑劣な裏切り者イスカリオテのユダを除いた十一弟子も、一塊になってつき従っていました。彼らは一時は激しい恐怖心からイエスを見捨てて逃げ去りましたが、師の悲劇が執行されている数時間の間に、申し合わせたようにひとりひとりとまたひとりと、丘を上っていました。互いの肩を抱き合うように体を寄せ支え合いながら、変わり果てていく師を凝視し続けていました。

マリヤも弟子たちも、イエスのその後については何一つ考えてはいませんでした。当然、遺体の埋葬が待っているのですが、どうしてそこまで思いを進めることができたでしょう。ヨセフが申し出るのを見て初めて、葬りがあることに気がつきました。ですからヨセフの発言はまるで天からの特別な計らいのようにありがたいものでした

ヨセフは遺体を運ぶローマ兵の先頭に立って、一行を墓地へと案内しました。しかし、マリヤを初め弟子たちが時間をかけて遺体と別れを惜しむ暇はありませんでした。いいえ、与えられませんでした。無情な兵士たちにせきたてられながら手早く遺体を包まねばなりませんでし

た。それでもヨセフの用意した亜麻布は極上のものでしたし、十分過ぎるほどの香料を残すとなく入れることができたのがせめてもの慰めとなりました。

が、遺体を安置し終えたとすぐに墓の入口はとてつもない大石で塞がれてしまいました。その上封印までするのを見せられては、一同切なく吐息をつくばかりでした。愛するイエスがようやく自分たちの手の届くところ戻ってきたのもつかの間、またしても手の出しようもない大石のかなたに、いいえ、官憲の囲いの中に閉じ込められてしまったのです。そこへ安息日の厚い壁が立ちはだかつてきました。涙をのんで立ち去るほかはありませんでした。せめて愛する師の眠る墓のかたわらで一晩や二晩は泣き明かしたいのです。それしかできないからこそ、そうしたいのです。しかし彼らは安息日を厳守するまぎれもないユダヤ人でした。古来からの習慣は彼らを市内の在所に引き戻しました。

マリヤだつて例外ではありません。

「でも、私は心を置いて行きます。先生のおそばに。安息日が明けたらいちばん先にきますとも」
夕やみに追い立てられるように帰る道々、マリヤは固くそう決意しました。

♣泣くマリヤ

今風に数えれば丸一日半に当たるでしょうか、でもマリヤにとっては人生でいちばん長い日でした。両の手で夜明けの幕を引き裂きたいような衝動を覚えながら、ようやく白んできた道を墓地へ墓地へとひた走りに走ったのでした。

と、

あつ、石がない！

墓の入口をふさいだはずのあの大石が見えません。なんと墓の口が開いているではありませんか。寝ずの見張りをした兵士たちの姿がただのひとりも見えません。

なにか、なにかが起こったにちがいない。

体が引き裂かれるような激しい衝撃を受けました。

総督の許可なしに封印を破れる者はいないはず。特別な事情のために遺体が別の場所に運ばれたとしか思えません。とにもかくにも仲間たちに知らせなければならぬ。マリヤはそう思いつくと、今まで走り続けてきた道を再び取って返しました。

「だれか、来てください。お墓が開いているのです！」

「なんだって！」

ペテロとヨハネがはじかれたように飛び出して行きました。

そのままマリヤは二人のあとを追いかけてきました。墓の近くまで来た時、引き返してきた二人に出会いました。ペテロもヨハネもうわずった声で

「主はおられないぞ。お体がない、ないのだ」

と繰り返しながら、仲間たちにも知らせようと思ったのでしよう、市内へと走り去っていきましました。

マリヤは、ああ、マリヤは、どうして帰れましょう。

そのまま墓のそば近くまで駆けよりました。墓は最初に見たとおりうつろに口を開けているばかりです。

「どうしてこんなことになったの。イエス様はどこ。だれがいったいこんなことをしたの」

開いた入口を見つめるのが精一杯でした。いいえ、それさえもできませんでした。深い悲しみの波が体の芯から大きなうねりを描きながらつき上げてきました。手や足が震え出し激しい嗚咽が始まりました。

イエス様がない、お体がない。どうしたらいいの。イエス様はどこにおられるの。だれか、

教えて。

一方で、今、目の前に起こっていることが事実でないような気がするのです。現実とは別の世界にいるような気がするのです。ふとマリヤは死んだはずの病魔が再び息を吹き返して自分を引きずり込もうとしているような不安に襲われました。

イエス様がここにおられないのは、ほんとうに起こったことなのね。確かにペテロもヨハネもそう言っていたはずだわ。私だけが幻覚を起こしているのじゃない。そうなのね。

自問自答の中で事実を確認すると、いつそう深い悲しみの波が容赦なくうち寄せてきました。マリヤはいつそう激しく泣き続けました。怖いのです。不安が強くなってその虜になりそうなのです。頼りとしていたイエスがもういなのです。これからはだれが病から守ってくれるのでしょうか。だれが暖かい声をかけ、だれが優しいまなざしを注いでくれるのでしょうか。どう生きていったらいいのでしょうか。どこに居場所を求めたらいいのでしょうか。

マリヤは砂つぶでの舞う荒野にひとり取り残されたような寂寥感に打ちのめされていました。体中の力が流れ出てしまってもろい空洞になっていくような気がしました。その中を行き場を失った悲しみが行きつ戻りつしていました。マリヤは泣くことしかできませんでした。他にどんな方法があるのでしょうか。

不意に、音がしました。いいえ、声でした。

「マリヤ、なぜ泣いているのですか」

マリヤの耳は確かに人声をとらえました。

えっ、何ですって。

こんな時に人の声を聞くななんて。ああ、私はほんとうに病気になってしまった。イエス様、助けてください。

が、すぐに打ち消しました。

いいえ、そうじゃない、確かに聞こえた。わたしは病気なんかじゃない。人の声でしたのよ。

「マリヤ、なぜ泣いているのですか」

声といっしょにあたりの空気が和らいだような気がしました。寒風がかき消えて、人肌のぬくもりを含んだおだやかな流れを感じました。

♣ イエスとの再会

振りかえると、男が一人立っていました。

まあ、だれもいないと思っていただけ、人がいたのね。そうだ、この人に聞いてみよう。こ

この管理人かもしれない。

「この遺体はどこに移したのでしょうか。教えてください。私が責任を持って引き取りますから」

マリヤはさすがのような思いで口早に言い立てました。この人に素っ気なくされたらまた闇の中に閉じ込められてしまいます。この人の返答によってはイエスの所在がわかるかも知れないのです。マリヤは少し息を弾ませました。

「マリヤよ」

マリヤは耳を疑いました。

「マリヤですって。どうして私の名を」

ああ、私はやはり病気なのだ。聞こえるはずのないことが聞こえてくるんだもの。

「マリヤよ、なぜ泣いているのですか」

「?!。あなたは…」

マリヤは瞭然と理解したのです。その声が紛れもないイエスだということを。それはマリヤの全身が覚えていた声でした。体の随所に刻み込まれていた声でした。マリヤに新しいのちを与えた声でした。愛とやさしさに満ちた天上の声でした。マリヤにとって神の声でした。そ

れが今再び聞こえるではありませんか。

「先生ですね！」

マリヤがどんな音色で貴い師の名を口に乘せ、発音したか、想像するのがいちばんいいでしょう。マリヤは高く叫ぶと、くるっと向きを変えてひざまずき、イエスの衣のすそにすがりつこうと手を差し出しました。

そのときです。一声が、響きました。

「触れてはならない、マリヤ」

耳を打つ声はマリヤの記憶にあるイエスの声とまったく同じなのに、別人のようでした。すぐそばから聞こえてくるのに、果てしないかなたから響いてくるようでした。マリヤはそつと手をひざに戻すと、確かめるようにイエスを見上げました。マリヤの意識は現実に戻っていません。不安が消えて静かにイエスを仰ぐことができました。イエスの顔には明るさがあふれていて、疲労も苦悩の跡も見えませんでした。マリヤが最初に出会ったイエスがいました。いいえ、それでもありません。間違はなくイエスでしたが、一度も会ったことのないイエスでした。「マリヤ、弟子たちのところに帰って、わたしがこれから父のもとに行くと言えなさい」

刻み込むようにイエスのことばを受け取りながら、マリヤは自分が今、とても貴重な稀有な

経験をしているのだと言い聞かせていました。マリヤはこの上なく興奮していましたが、小さな余裕も生まれていました。イエスとの間にある厳肅な距離がかえって落ち着きを与えてくれました。

父のもとに帰るとはいったいどういうことでしょう。父とは天の神様のことでしよう。イエス様はよく天の神様のことを、ご自分の父と呼んでおられたから。イエス様は死んだら神様のもとに行くはず。これから天に行くのだったら、イエス様は死んではないことになる。でもイエス様は死なれた。あの十字架の上で完全に。だからこそこのお墓に葬ったのだわ。私もお手伝いをした。でも私の目の前に立つお方はたしかにイエス様。私にお声をかけるお方はイエス様ご本人だわ。ということは、ああ、イエス様は生きておられるのよ。

私はよみがえったイエス様にお会いしているんだわ。

「このことを弟子たちのところに帰って伝えなさい」

マリヤは体中にイエスのことばを響かせながら、イエスの言われたとおりに町に引き返して行きました。

マリヤの足取りは軽やかです。心が軽いのです。弾みを感じるのです。

言いますとも、イエスさま。よみがえりのイエス様にお目にかかりましたって。言いますと

も、イエス様。言いつづけ語りつづけ、伝えつづけて、生きていきますとも。命のあるかぎりあなたのおことばのとおりにいたします。そう、あなたのおそばに帰る時まで。

このあたりで、そろそろ第四話の扉を閉めましょう。

えっ、まだ聞こえてきますか、マリヤの歓喜の声か。そのはずです、マリヤだけでなく四人の女性たちの歓声はたぶん扉を閉めても聞こえ続けるでしょう。魂の声は同じ波長の魂に、歳の山脈を越えてごだまし続けるものですから。